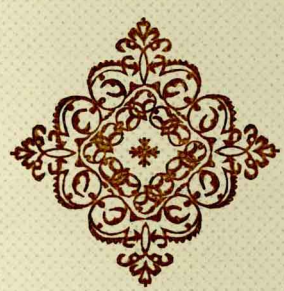


A TREASURY OF WORLD LITERATURE

新集 世界の文学

42

フォースター

天使も踏むを恐れ　荒 正人訳

ハワーズ・エンド　小池 滋訳

中央公論社

新集 世界の文学 42 ©1971

ゼーガース
ノサック

訳者 藤本淳雄
川村二郎
飯吉光夫

昭和46年12月10日初版印刷
昭和46年12月20日初版発行

発行者 山越 豊

本文整版印刷 三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷 求竜堂印刷株式会社
口絵印刷 凸版印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
クロス 日本クロス工業株式会社
函ボール 佐賀板紙株式会社
製函 加藤製函印刷株式会社
製本 小泉製本株式会社

発行所 中央公論社

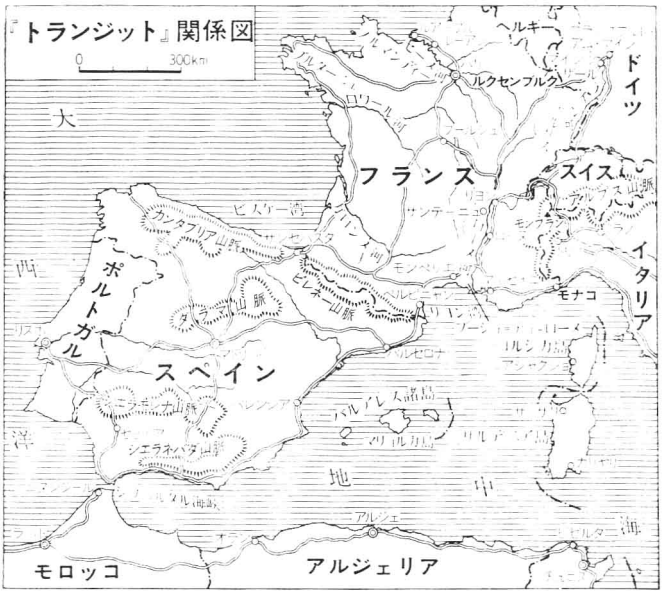
東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代) 振替東京34

目次

ゼーガース　3
トランジット　303
ノサック　421
死者への手向け　477
配電盤　494
標柱　522
解説
年譜

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongb

トランジット


『トランジット』関係図
0
300km
ドイツ
ルクセンブルク
ヘルキ
フランス
スイス
イタリア
モナコ
ポルトガル
スペイン
モロッコ
アルジェリア
大
西
洋
地
中
海
カンタブリア山脈
ピレネー山脈
ピレネー山脈
ベルセロナ
バレンシア
バレアレス諸島
アルジェ

第一章

一

「モントリオール」は沈没したと言いますよ、ダカールとマルティニクのあいだで。機雷にぶつかってね。船会社はなにも教えてくれやしない。ことによるとみんな噂にすぎないかもしれませんしね。ほかの船の運命とくらべてみれば、避難民というお荷物を積んで海という海を追い立てられて、どうしても港に受け入れてもらえなかった船、船客の証明書が二、三日前に期限切れになったというだけの理由で、錨を下ろさせるよりはと沖合で燃えつきるまでほっておかれた船、そんな船の運命とくらべれば、この「モントリオール」の沈没なんぞ、戦時では船にとっては自然死というものですからね。すべてがまたしても噂にすぎないってことでなければです。あの船がその間に拿捕されたとかダカールへの帰港を命ぜられたとかでなければね。そんなことだったらいまごろ船客たちはサハラの縁のどこかの収容所で蒸されていますぜ。ことによるとみんなもうまいこと大洋の向う岸に着いているってこともありますしね。――そんなことはみんなどうでもいいじゃないかってわけですね？　退屈していらっしゃるんですな？――わたしもなんです。ひとつわたしの奢りとさせてくださいよ。ちゃんとした夕食にお招きするだけの持ち合わせは残念ながらありませんがね。ロゼを一杯と、ピッツァ一枚です。どうかここへお掛けになって！　どちらと向い合わせがお気に召しますか？　ピッツァを裸火で焼いてるところですか？　それならわたしの隣にお掛けください。旧港ですか？　それならわたしの向い側になすったほうが。サン＝ニコラ堡塁のむこうに日が沈んでゆくのをごらんになれますよ。これなら退屈なさりっこない。

　このピッツァてのは変わったケーキですねえ。まるくって色あざやかなところはトルテみたいだ。なにか甘いものだろうと期待する。それが噛んでみると胡椒とくるんだから。こいつをもっとくわしく眺めてみる。すると気がつくんですね、いっぱい詰まってるのはさくらんぼや乾葡萄なんかじゃなくて、パプリカとオリーヴってわ

けです。それにも慣れてしまいますがね。ただ残念なのは今じゃここでもこのピッツァにパンの配給切符が必要なんですよ。

あの「モントリオール」がほんとうに沈没したのかどうか、知りたいもんですよ。あの人たちはみんな、やっぱりむこうに辿り着いたとしての話ですが、あちらじゃ何をするんですかね？　新しい生活をはじめる？　職業に就く？　委員会に入る？　原始林を開墾する？　ええ、もしほんとにあちらにはそんなものがあるなら、完全な未開地がね、だれもかれも若返らせてくれるような、もしそうなら、わたしはいっしょに乗っていかなかったことを後悔する気にもなりそうですね。――わたしにはつまり、いっしょに乗ってゆく可能性はちゃんとあったんです。わたしは支払い済みの切符があった、ヴィザがあった、通過査証があった。それなのに急に居残りのほうを選んだのです。

あの「モントリオール」には、わたしがほんのしばらく知り合いになったことのある二人連れが乗ってました。あなたもご存じでしょうよ、停車場で、領事館の待合室で、県庁の旅券課でのこうした束の間の近づきがどの程度のものかってことはね。あの二言三言ささやき交す言葉なんてのは、実にもうはかないものでしてねえ、いそいで両替えする貨幣みたいなもんです。ただときおり、人はひょいと一声の叫び、ひとつの言葉、あるいはその、ひとつの顔にぶつかることがある。それがぴりっとくる、あっという間のことですよ。目を上げる、耳を傾ける、と、もうなにかに捲き込まれているんです。わたしは一度すっかり話してしまいたいんですよ、始めから終りまでね。他人を退屈させやしないかっていう心配さえしないで済むものならですよ。もう飽き飽きしていらっしゃるんじゃありませんか、この種の心をかきたてる報告というやつは？　すっかりうんざりしておいでではありませんか、あやうく乗り越えた死の危険、息詰まる逃走なんといった、あの手に汗にぎる物語には？　わたしのほうは、こういうのはみんなもうほんとにたくさんですね。今日でもまだ何かわたしの心をかきたてるものがあるとすれば、それは、鉄のワイヤーを巻く男の報告なんてものかもしれません、その男が長い生涯の間にもう何メートルのワイヤーを巻いたか、どんな道具を使ったのか、なんてね、あるいは、二、三人の子どもが学校の宿題をやっているその手許を照らすまるい燈火とか。

ロゼにはお気をつけになってください！　こいつは見

てくれのとおり口あたりがいいんです、木苺ジュースみたいに。信じられないくらい朗らかにおなりですよ。くよくよすることなどありはしない。なんだってすらすらと言葉になる。さてそれからです、あなたがお立ちになると、膝がかくかくと来るんですよ。そして塞ぎの虫です、永遠のふさぎの虫が取りつきましてね——次のロゼまで。ただじっと坐ったままでいるしか手はない、二度とふたたびなにかに捲き込まれないことです。

わたし自身は昔は簡単に事件に捲き込まれたものです、今日となってはお恥ずかしいようなことですがね。まあちょいと恥ずかしいってだけのことです——過ぎてしまったことですし。もし他人様を退屈させるなんてことでは、これはひどくお恥ずかしいことになるわけですが。それでもわたしは一度あらいざらい始めっからお話ししてしまいたいんですよ。

二

冬の終りにわたしはルーアンの近くのある徴用者収容所に入れられました。世界大戦のあらゆる軍隊のうちでいちばんみすぼらしい制服を着る羽目になったわけです、フランスの「軍徴用者」のをね。夜は、わたしたちは外国人でしたから、なかば捕虜でなかば兵隊ですからね、鉄条網のなかで寝て、昼は「勤労奉仕」をしたんです。わたしたちはイギリスの軍用船の荷卸しをしなきゃなりませんでした。おそろしく爆撃を喰いましたよ。ドイツの飛行機は、その機影がわたしたちを掠めるほど低く降りてきました。あのときに合点がいきました、死の影の下に、なんて言いかたをするのがなぜだかね。一度は若い子と組んで荷卸しをやりましてね、フレンッヒェンていうんですが、その子の顔はわたしから、ちょうど今のあなたの顔くらい離れてましてね。日が照っている、空気が鳴る。それでフレンッヒェンのやつが顔をあげる。ともう、低く突っ込んでくるんです。かれの顔が機影で黒くなる。ひゅん、わたしたちの横へどかんと落ちる。あなたもこんなことはみんな、御同様に逐一ご存じのわけですね。結局はどんなものにも終りがあるってことでして。ドイツ軍が近づいてきました。この期に及んでは、恐怖に耐え苦難を忍んできたことも、なんの役に立ちましょう？　世界の没落が迫っているのです、明日にも、今夜にも、今すぐにも。なにしろ、わたしたちはみんな、ドイツ軍の到着というのはそんなふうなことなんだって、信じていましたから。わたしたちの収容所じゃてんやわ

んやの騒ぎがはじまりました。泣くのがいる、お祈りするのがいる、生命を絶とうとこころみるのがいる、それに成功したのもいます。何人かは、雲隠れしようと決心しました、最後の審判から逃げだそうってんです！　ところが指揮官は、わたしたちの収容所の門前に機関銃を据えつけていました。わたしたちはかれに説いて聞かせたんですが、まるで無駄骨折でしてね、ドイツ軍はわたしたち、ドイツから逃亡した同胞を、立ちどころにばりばりと皆殺しにするだろうって言ったんですが。ところがかれには、受け取った命令を下に伝える能しかないときてる。それでかれは、この収容所をどう処置すればいいのか、命令を待っていたんです。かれの上官みずからはとっくにずらかっていました、わたしたちのいた町は疎開になっていましてね、近隣の村々からは百姓たちがもう逃げてしまっていました――ドイツ軍はあと二日、それとも、もう二時間の距離にいるのか？　ところでわたしたちの指揮官は、それでもいちばん悪いほうじゃなかったんですよ。かれにも公正にしてやらなきゃいけませんや。かれにとってはこれはまだ本物の戦争だったのです、かれにはあの卑劣な事の次第がわかっていなかったんですね、裏切りの程度がね。結局わたしたちはこの男と一種の言わず語らずの協定を結びました。取消命令は来ていませんでしたから、機関銃一台は門の前に据えたままでした。しかしかれは察するに、わたしたちが塀を乗り越えても、わたしたちの後からあまりひどくは弾丸を浴びせないであろう、というわけです。

こうしてわたしたち、二、三十人の連中は、夜中に収容所の塀を乗り越えました。わたしたちのひとり、ハインツというのが、スペインで右脚を失っていました。市民戦争の終結後ながいあいだ南の方の収容所をあちこちしていたんです。どういう風の吹きまわしですかね、なにかの間違いで、ほんとうにもう徴用者収容所などには用のないかれが、不意にそんな北のわたしたちのいるところへ引っ張ってこられたんですよ。このハインツを、今や友人たちがかつぎあげて塀を越させてやらなきゃなりませんでした。みんな交替でかれをかついでやりました、おそろしく急いでましたからね、夜の闇のなかへ、ドイツ軍に追いつかれぬように。

わたしたちはめいめいが、ドイツ軍の手に落ちたくない、根拠は十分の理由があったのです。わたし自身は一九三七年にKZ（強制収容所）からずらかっていたんです。夜陰にラインを泳ぎ渡ったものでした。そのことを半年の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

間はかなり鼻にかけていたんですがね。その後また別のもっと新しい事件が、世界にもわたしにも押しよせてきました。今、このフランスの収容所からの、二度目の逃亡のとき、わたしは最初のドイツの収容所からの逃亡のことを考えたものです。――フレンツヒェンとわたしはいっしょに道を急いでいました。この当時の大多数の人たちと同じように、わたしたちはロワールを渡ろうという間抜けな目標を追っていたのです。わたしたちは大通りは避けまして、畑地を越えて走りました。住民が立ち去って、乳を搾ってもらえない牛が呻えたてている村々をとおりましてね。なにか口にするものを捜したのですが、なにもかも食べつくしてありました、すぐりの繁みから納屋にいたるまでね。なにか飲みたいと思っても、水道管は切断されていました。今はもう銃声も聞こえませんでした。ただひとり取り残されていたのが村の白痴では、なんの情報も伝えてくれることはできませんでした。するとわたしたち二人とも不安になってきましてね。この死滅状態はドックへの爆撃よりも胸をしめつけるものがありましたよ。結局わたしたちはパリ街道にぶつかりました。わたしたちはほんとうにまだまだとても殿なんてものじゃありませんでしたよ。北のほうの村々からは相も変わらず、黙々と進む避難民の流れが注いでいましてね。収穫用の車がありました、家具を積んで、家禽を入れた籠や子どもたちや化けて出そうな老人たち、山羊に小牛まで積んで、農家一軒の高さはあるんですよ、尼僧院をまるごと積み込んだようなトラック、母親が荷車に乗せてよたよた曳いている小さな女の子、無事に持ちだした毛皮にくるまって、きれいな、こちこちに緊張した女たちが乗っている自動車、でもそれらの自動車は牛が牽いていたんです、なにしろもうガソリンスタンドなんてありはしませんでしたからね、瀕死の子どもたちを引きずってゆく女たち、いや死んだ子もいましたよ。

そのとき初めてはっと思ったんですよ、なぜこの人たちはいったい逃げるのかとね。ドイツ軍が来るからですか？　やつらは機械化されているんですよ。死が来るからでしょうか？　こいつは疑いもなく道の途中でだって追いつくでしょう。でもこの考えは咄嗟にはっと閃いたというだけでしてね、その世にもみじめな人たちを見たときだけのことなんです。

フレンツヒェンはどこかに飛び乗って、わたしも一台のトラックに席を見つけました。どこかの村の手前で別のトラックがわたしの乗っているのに突っ込んできて、

その先はまた歩かなければなりませんでした。フレンツヒェンの姿は永久に見失ってしまいました。

わたしはふたたび畑地を斜めに突っ切りました。一軒の大きな、街道を遠くはずれた、まだ人の住んでいる農家の前に出ました。わたしは食べ物と飲み物をねだりました。いや驚きましたね、そこの主婦は庭のテーブルの上に一皿のスープとワインとパンを出してくれたんです。そのとき彼女が話してくれたところでは、その家の人たちも、長い内輪もめの末、立ち退くことに決めたところだというんです。もうすっかり荷造りはできていて、今はもう積み込むばかりだということでした。

わたしが食べたり飲んだりしているあいだ、飛行機がかなり低空でぶんぶんやっていました。わたしは頭も上げられぬほど疲れきっていました。それにまたかなり近くで、短い機関銃の銃火も耳にしました。それがどこから聞こえてくるのか、皆目見当もつきませんでしたし、なにしろもう精も根も尽きて、じっくり考えてみるどころじゃありませんでした。ただもう、きっと後でこの人たちのトラックに飛び乗ることができるだろう、ということばかり考えていたんです。もうエンジンはかかっていました。主婦もいまは興奮してトラックと家のあいだを駆け足で行ったり来たりしていました。それを見ていると、この美しい家を立ち去ることがどれほど彼女に辛いことか、よくわかりましたね。こうした場合にはだれでもそうなるものですが、いそいでなお手あたり次第に不要の品を積み込んでいましたよ。それからわたしのテーブルへやってきて、わたしの皿を取り去り、こう叫びました、「おしまい！」

とどうでしょう、その彼女の口が開いたままなんですよ、目を見はって庭の垣根越しに外を見つめているんですね、わたしも振り向いてみる、と、見えましたよ、いや、聞こえたんですね、もうおぼえていませんや、まず見たのかそれとも聞いたのか、それとも両方同時だったのかね——おそらくエンジンのかかったトラックがオートバイ乗りの来る音をかき消していたんです。今や垣根のむこうに二台止まりました、どちらも二人ずつ助手席に乗せていました、そしてかれらは緑灰色の制服を着ていました。ひとりが、わたしに聞こえるほどの大声でドイツ語で言いましたよ、

「南無三、糞っけつだ、今度は新しい皮紐もいかれちまった！」

ドイツ軍がもう来ていたのです！　かれらはわたしを

追い越していたんですよ。もうおぼえていませんね、自分がドイツ軍の到着という事態にどんなことを想定していたか――とにかく驚天動地の大事件です。ところがさしあたって起こったのは、庭の垣根のむこうにオートバイが二台乗りつけたというだけのことでした。効果は同じくらい大きなものでしたよ、あるいはもっと大きかったかもしれない。わたしは腰を抜かして坐っていました。シャツは瞬時にして汗ぐっしょりでした。最初の収容所からの脱走のときでさえ感じなかったこと、飛行機の攻撃下に荷卸しをするときでさえおぼえのなかったことを、それをいま感じたのです。生まれてはじめて、わたしは死の不安を感じました。

どうか御辛抱なすって！　もうすぐ本題に入りますから。あるいはおわかりいただけましょうか。一度はだれかにすべてを順を追ってお話ししてしまわなければならないものですよね。わたしは今日ではもう自分でも説明がつかないんです、どうしてあんなに怖がったんですかね。発見されることをでしょうか？　銃殺されることでしょうか？　ドックでだっておなじように闇から闇へと消える可能性はあったわけなんですよ。ドイツへ送還されることでしょうか？　じりじりと苛まれて死に近づいてゆくことでしょうか？　これは、わたしがラインを泳いで渡ったときにも味わわされたことですよ。わたしはそれにいつでも好んで危ない綱を渡って生きてきたもので、いつだって焦げくさい臭いのするところが性に合っていましたしね。で、自分はいったい何がこうやたらと怖いんだろうとよく考えてみると、それでもういくらか怖さも減ってきました。

わたしは、いちばん賢明で同時にいちばん単純な道を取りました、坐ったままでいたのです。ちょうど自分のベルトに穴をふたつ開けたいと思っていたところでしたから、ここでそれをやったんです。農夫が気の抜けた顔で庭へ出てきて、自分の女房に言いました、

「こうなっちゃ残っているのもおなじことだな」

「そうともね」と女房はほっとしたように言い、「でもあんたは納屋に入ってな、わたしが連中と話をつけるわ、まさかわたしを取って喰いはしないだろうよ」

「おれとてもさ」と夫が言いました、「おれは兵隊じゃねえ、やつらにこの内反足を見せてやるさ」

とこうするうちに一縦隊全員がその垣根の後ろの草原に乗り入れてきました。かれらは庭に入ることもしませんでした。三分後には先へ進んでゆきました。四年この

かた初めてわたしはまたドイツ語の命令を耳にしましてね。いや、そのけたたましいこと！　すんでのことに、自分のほうから飛び上がって直立不動の姿勢を取るところでしたよ。後になって、この同じオートバイ部隊が、わたしがその前にやってきた避難民街道を遮断したと聞きました。すべてこの秩序、この命令が、世にもおぞましい大混乱を惹き起こしたといいます、血は流れる、母親たちは泣き喚く、わたしたちの世界秩序の解体です。けれどもこうした命令を伝える声の底には、なにか下賤に明晰なもの、卑劣にまっとうなひびきがあったんですね――大きな口をきくんじゃない！　おまえらの世界がもう没落するほかはないのなら、おまえらがその世界を防衛しなかったのなら、おまえらが、その世界が解体されるのを容認するのなら、それなら逃げ口上はよせ、それならさっさとするんだ、それなら指揮はおれたちにまかせろ！

でもわたしは不意にすっかり落ち着いてきました。自分はここに坐っているわけだ、と考えましてね、そしてドイツ軍はわたしのかたわらを進軍してフランスを占領する。

しかしフランスはもう何度も占領されたことがあるんだ――みんなまた退去しなければならなかった。フランスはもう何度も売られ裏切られてきた、そしてきみたちも、緑と灰色の若者諸君、やはりもう何度も売られ裏切られてきたわけだ。わたしの不安はすっかり消えて無くなっていました、鉤十字もわたしの目には幻の影でしたよ、わたしは世界の最強の軍隊がその庭の垣根のむこうに進軍してきては退去してゆくのを見ていました、わたしはもっともあつかましい諸帝国が崩壊して若い大胆な国々が立ちあがるのを見、世界の主人たちが興隆しては衰亡してゆくのを見ていました。わたしだけが測り知れぬ長い寿命を持っていたのです。

ともかく、ロワールを渡ろうというわたしの夢も今は終りでした。わたしはパリへゆこうと決心しました。あそこなら何人かまともな人間を知っているわけでした、かれらがまともでありつづけたとしての話ですがね。

三

わたしは五日の旅程でパリに向かいました。ドイツ軍の隊列はわたしと並んで進んでゆきました。かれらのタイヤのゴムはすばらしいものだし、若い兵士隊は選り抜きでしてね、強くて美しくて、かれらは戦わずして一国

を占領したわけです、かれらは朗らかでした。はやくも街道のむこうにはぽつぽつと農民が出て笑顔を見せていました——まだ大地が自由であったときに種播きがしてあったのです。ある村では死んだ子のために鐘が鳴っていました。街道で血を流して死んだんですね。ある十字路に壊れた荷車がありました。あるいは死んだ子の家のものだったのでしょう。ドイツの兵士たちがそこへ飛んでいって、その車輪を修繕しました、農民たちはその親切なことを褒めました。野良の石にひとりの若者が坐っていて、わたしくらいの齢恰好でしたが、名残りばかりの軍服の上に外套をまとっていました。泣いていましたよ。わたしは通りすがりにその肩を叩いて、こう言ってやりました、

「みんな当座の間のことだよ」

かれは言うのです、

「ぼくらはあそこを持ちこたえられたんだ。だのに豚どもは一時間分の弾薬しかよこさなかった。ぼくらは裏切られたんだ」

わたしはこう言っておきました、

「最後の結果はまだ出たわけじゃないさ」

わたしは先へ進みました。日曜日の朝にパリに入りました。鉤十字の旗がほんとうに市庁舎の上になびいていました。かれらはほんとうにノートル＝ダムの前でホーエンフリートベルガー・マーチを演奏していました。わたしは不思議で不思議でしかたがありませんでしたね。パリの町を駆けずりまわりました。そしてどこへ行ってもドイツの車が駐車していて、どこへ行っても鉤十字で、わたしはすっかりうつろな気分になりました、もうまるで感情というものを失った感じでした。

わたしは、この狼藉のすべて、他の諸民族を蔽う不幸が、わたしの民族から出たものであることを、恨めしく思いました。なにしろかれらがわたしと同じ言葉で話していること、わたしと同じように口笛を吹くこと、これは疑う余地がありませんでしたからね。わたしはクリシーへ上ってゆきながら、そこにはわたしの古くから親しくしているビネ家の人たちが住んでいたのですが、そのとき自分の胸に訊いてみたものです、ビネ家の人たちは、わたしがこの民族の一員にはちがいないけれども、しかし依然としてわたしなのだということを、理解してくれるだけの分別を持ち合わせていてくれるだろうなって。かれらは証明書がなくてもわたしを受け入れてくれるだろうか、と心で呟いていたんです。

かれらはわたしを迎え入れてくれました。かれらは分別があったのです。昔はこの人たちの分別によく腹を立てたものでしたがね！　わたしはイヴォンヌ・ビネといい仲だったのです、戦争前に六ヵ月の間ですが。彼女はやっと十七歳でした。そしてわたしは、故郷から逃げ出し、あの糞溜みたいな世界、濃密な感情の息苦しい淀みを逃げ出してきていたのに、この馬鹿なわたしは、心のうちでよくビネ家のすっきりした分別に腹を立てたものです。わたしの感情からすれば、家族じゅうが人生をあまりにも分別くさく見ていたのです。かれらはたとえばその分別において、ストライキをするのは、次の週にもっと上等の肉を買えるようにするため、と考えていました。それどころか、もし毎日三フラン余計に稼げたら、家族じゅうが、もっと満ちたりた思いだけでなく、もっと力強く幸福な思いをするのだ、などとさえ考えていました。そしてイヴォンヌはその分別で、恋はわたしたち二人を楽しませるためにあるのだ、と信じていました。でもわたしのほうは、もちろんわたしはそれを隠してはいましたが、わたしのほうは骨の髄までこたえていたんですよ、恋はときには悩みと韻が合うものだってこと、死や別離や不幸せについて、小唄のひとつも口笛で吹いてみないではいられぬものだということ、幸せが理由もなくだしぬけに訪れることのあるものなら、悲しみもそれは同じことで、幸せがときには気もつかぬうちに悲しみに変わってしまうものだ、ということがです。

でも今はビネ一家のこのすっきりした分別がわたしにとって恵みであることがはっきりしたわけです。かれらは喜んでくれ、わたしを迎え入れてくれました。かれらは、わたしがドイツ人だからといって、わたしをナチと取り違えるようなこともありませんでした。ビネ家の老人たちは家にいました、それに一番下の息子も、これはまだ兵隊に行っていませんでしたから、それから次男で、これは情勢がどうなっているかを見て取って、時宜よく軍服を脱いでしまっていたのです。ただ娘のアネットの夫だけがドイツの捕虜になっていました。彼女は今は子どもを連れて両親のもとに身を寄せていました。わたしのイヴォンヌは、みなが当惑顔で話してくれたところでは、南の方へ疎開させられていて、そこで一週間前に自分の従兄と結婚したところでした。でもわたしにはそんなのどうってことはなかったのです。わたしは頭から足の先まで、恋がどうのなんていう状態じゃありませんでしたからね。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb